

うち・そとの仲間たちと学び育てよう！里山の生き物と地域の未来  
—おやじの料理教室・生き物ブランド・遊び・インターンシップ等々、各地事例から学ぶ  
新視点—

2014年12月14日

東京農業大学学術研究員 出川真也

1. 生き物の里と地域を育てる4つの視点

- (1) 地域に根ざした住民の日常的な活動の創出
- (2) 地域運営の視点（地域活性化の視点）
- (3) 保全と活用（活用による保全効果の最大化）
- (4) 外とのつながりづくりの視点

2. 生き物と地域づくりに取り組む各地事例の紹介

(1) おやじの料理教室から里山・生き物保全活動へー滋賀県近江八幡市の事例ー

平成15年度近江八幡市健康推進課が、退職男性が地域の中での居場所や仲間、生きが  
いづくりとして「おやじサロン」を開設されました。

月一回「おやじの料理教室」、自分達で作る喜び、食べる喜び、皆でおしゃべりしなが  
ら触れ合う喜びが得られた参加者が、平成16年4月「おやじ友の会」を結成し、月一回  
の「例会」としておやじの料理教室を続けています。

料理だけではなく、「グランドゴルフ」「サイクリング」等年2回実施しています。ま  
た、シニアグループの行事「おやじ連作品展」「シニアグループ紹介パネル展」など、積  
極的に参加をしている。

平成16年9月より、「近江八幡市水と緑の環境会議」の自然部会が進める「白鳥川の環  
境美化活動」に参加し、四季を通して花を咲かそうと、花菜、ひまわり、コスモス、水仙の  
植え込み、除草、整地作業を続けています。

「近江八幡の親父たちの竹取物語 —竹林の再生整備と間伐竹の活用—」

報告者：小関皆乎（いまさかPJ代表）

配布資料：チラシ「親父たちの竹取物語」

説明資料：パワーポイント「いまさかPJの間伐竹再生活用」

近江八幡市は琵琶湖東岸に位置し、ラムサール条約登録湿地である西の湖、伝統的建造  
物群保存地区である八幡旧市街、重要文化的景観選定地区である水郷集落があり、環境面  
に配慮した活動に力を入れている地域だ。

いまさかPJでは、3Rを重要視しながら、放置からの再生と循環をキーワードに、町  
づくり、人づくり、環境と文化、農と食をテーマに活動を行っている。竹林整備活用にか  
かわる活動を中心に紹介したい。

### 1) 竹林整備活用事業の目的

近江八幡市の中心部に位置する八幡山は、歴史的価値の高い豊臣秀次の居城跡だが、近年竹が侵入して保全上好ましくない状況となっている。こうした里山の放置竹林を整備して里山景観を再生するとともに、間伐した竹材を地域でさまざまな形に循環活用して、市民の日々の暮らしを見直すきっかけにしていきたいというのが私たちの事業目的だ。

### 2) 伐採竹を水郷地区の耕作放棄地の再生活動に利用

水郷集落の円山地区では、田舟でしか行けない不便な水田が放棄されており、ヨシ原がススキに代わってヨシ原に外来植物が侵入し、希少生物や絶滅危惧種の生息環境の悪化が懸念されている。そこで田舟を用いて資機材を運び、耕作放棄地の再生活動に取り組んでいる。

里山の竹林整備と水郷地区の耕作放棄地の再生活動を結び付けることで、生物多様性の保全を図ると共に、里山の活動で出た伐採竹材を水郷地区に運びハウスをつくったり、竹粉化して肥料として活用するなどの取り組みを図っている。特に竹パウダー製造機を導入して製造した竹粉を用いた作物生産では、これまでのところ大変よい結果を得ることができている。この他竹粉を近江牛の飼料への活用も検討している。

### 3) 竹利用の多様な試み

間伐竹の生活の中での有効利用も図っている。竹を用いた楽器によるバンブーオーケストラコンサートの開催や、竹材を用いた観光用自転車タクシー「竹リキシャ」、竹粉育ちの青じそジュース、八幡山城跡の竹柵など幅広く活用を展開しているところだ。

### 4) 地域を取り巻く多様な主体とのネットワークング

定年退職男性の市民活動組織で24の参加団体を持つ「近江八幡おやじ連」をはじめ、NPO法人近江八幡市中間支援センター、近江里山を歩こう会、八景会（八幡山の景観を良くする会）、湖畔隊、景観隊（白鳥川の景観を良くする会）など、各種保全活動団体と連携しながら事業を進めている。ネットワークの力によって森から湖まで繋がることのできる活動を展開している。

### 5) 竹粉の利用を契機とした地域循環の仕組みづくりを目指して 一森と湖をつなぐ一

保全活動によって発生した伐採竹による竹粉を使った作物づくりは、概ね良い効果を出している。今後は、こうした保全活動と活用とを同時に進めながら産業界の人たちとも連携し、有機農家、外食産業、畜産など異分野・異業種を結び付けることで循環するいわば「竹粉循環システム」を検討し実践していきたいと考えている。

八幡山・円山水郷地区は様々な生き物の宝庫だ。ツルスゲをはじめ様々な絶滅危惧種も見られる。取組によって美しいヨシ原が残され、多様な生き物の保全にもつながるものだと思う。そのためにも森から湖までの一貫した取組を大切にしていきたい。

### (2) 生き物をシンボルにした地域ブランド作りー神奈川県茅ヶ崎市 タゲリ米の事例ー

水田に生息する鳥タゲリをシンボルに環境保全と地域づくりに取り組んでいる。タゲリ米

や地元のお米で造った焼酎「たげり」など特産品販売と、ビオトープ水田や魚道の設置活動など通じて、地域振興と保全活動の両面で効果をあげている。

またブックレット「ようこそタゲリ米の里へ」による環境教育活動、観察会や米作り等の体験交流活動など幅広い取組を展開し普及啓発に努めている。

茅ヶ崎市西久保地区は、相模川が運んだ土砂によって形成された沖積低地で、かつての自然堤防の外側は標高1～2mの後背湿地となっている。ここは水田として利用されてきた。この水田地帯を流れる小出川は河川改修によって直線化されたものの、コンクリート護岸されておらず水田と水路で直接つながっていることから、水辺を行き来する水生・湿地生生物に生息場所を提供している。また、水田の土手にはカントウタンポポやワレモコウなどの貴重な在来植物が生息している。このように生物多様性上重要な意味を持つこの地域の水田環境は、周辺が市街化する中で年々重要なものとなっている。

水田を餌場にするタゲリは、冬シベリアから飛来する渡り鳥で「冬の貴婦人」とも呼ばれる代表的な野鳥である。

茅ヶ崎市の市民の自然保護グループ「三翠会」では、この地区の貴重な水田環境を残すため、タゲリをシンボルにした保全活動をスタートさせ、保全と営農振興の両面から取組を行っている。

### (3) 環境を利用した遊びと人材育成—NP0 大地の事例 里山の保全と活用—

### (4) インターンシップ・フィールドワーク等の受け入れと活用

—サービ斯拉ーニング・参加型アクションリサーチなど大学の地域参加カリキュラムの活用—

## 3. 取り組みを確実に進めるためのプロセス検討

調査・構想→検討・試行→実行計画策定・体制整備→実施→検証・評価→……

(参考) 地域づくりに関する10の命題 (E. ハミルトン「成人教育は社会を変える」玉川大学出版 2003. p. 27)

- ① 高い水準の知識と技術を持っている市民団体は、活動の目標を成功裡に達成できる可能性が高い。
- ② 意思決定に向けて協力し合える市民は、変革をめざす活動に強い責任感と意欲をもって参加しつづけることができる。
- ③ 地域住民が実際に抱えているニーズを充足させようとする取り組みでは、そうでない活動に比べ、より多くの市民の協力が得られる。
- ④ 地域に根ざした活動に協力する専門家のうち、自分たちの役割をファシリテーター(学習

- 支援者)として認識している者は、地域住民に受け入れられやすく、信頼も得やすい。
- ⑤地元主導で行なわれる地域課題の解決手法は、行政の画一的な介入よりもよい結果を生み出す。
  - ⑥成人の学習が住民組織の中の活動として行なわれることによって参加者の間で横のつながりが強まり、地域の課題の解決に向けて効果的に活動できるようになる。
  - ⑦通常の場合、フォーマルな教育は、社会変革をもたらすというよりも、社会の現状を維持する方向に働く。これに対し、ノンフォーマル教育は社会変革、つまり、社会の現状を改良する (reform)、あるいは抜本的に転換させる (transform) ことを促すための目標に答えようとするものである。
  - ⑧民主主義の考え方によれば、人々が自分の運命を自分自身で決めようとする一つまり自己決定の努力をする一ことによって、自立をめざした動きが起こりやすくなる。
  - ⑨多くの地域社会には、才能やエネルギーの面から見ていろいろなタイプの住民が居住している。彼らが組織化されたとき、それらの能力を地域社会の向上のために活用することができる。
  - ⑩社会変革はボトムアップ方式ですすめられるべきである。なぜなら、ボトムアップ方式は住民が自分の考えを表明する場を保障するため、住民参画への強い動機づけとなり、地域社会に潜むニーズの把握、活動の計画と実施、地域づくりを民主的にすすめることに役立つからである。